鹿児島ダーウィン

上野　総一郎

城山の麓、四方の 180 度以上を山に囲まれた処に住んでいる。

街はマンションが建ち様変わりしたが、緑の量は半世紀前と然程に変わっていない。

近頃、野生生物が増えたと感じている。顕著なのは鳥類である。

深夜に目覚めると声が聞こえる。ゴロスケホッホウは唱歌で覚えたフクロウ、ただのホッホーはアオバズクか。夜明け前にテッペンカケタカと大きな声、これはホトトギス。

お堀端を歩けば、醍醐天皇から冠位を授かったとされるゴイサギに遭える。碧く輝くカワセミや、仲睦まじげなカルガモ夫婦も見かける。北埠頭の緑地を行くとハクセキレイを瞬く間に狩るハヤブサがいる。

哺乳類はどうか。タヌキは昔からいた。彼らは警戒心が強く滅多に姿を現さないが、小高く糞の山を作るし、蒸し暑い夏の夜、窓を開けているとその匂いで来ていることを知らせてくれる。新参者はアナグマだ。人を怖がらないのか、丸々とした姿で陽が落ち切らないうちから道端をよちよち歩いており、夜の間に人の庭を掘り返したりもする。

爬虫類は勢力図が変わったように思われる。アオダイショウやシマヘビの大型種がいなくなり、小さなヒバカリを見かけるようになった。カナヘビやニホントカゲも少なくなった。代わってニホンヤモリが街灯の下に集まり、羽虫を食べている。

昔は、ドバトの群れが空を旋回していた。霞網やメジロの雌を入れた鳥籠の罠も見た

ものだ。私が生まれた某大学病院が引っ越したあと、家にネズミが増え難儀をした。

　カラスやムクドリの害は未だに聞くが、概してヒトの自然への干渉の仕方がかつてより賢くなってきたように思われる。自然豊かな郷土を誇るには、豊かな生態系もまた必要であろう。